

『鳳城聯句集』訓注稿（一）

楊 昆 鵬

『鳳城聯句集』は後陽成院を中心に公家と五山禅僧などが制作した聯句作品を、超然主人が集成し、元禄三年（一六九〇）に刊行されたものである。

後陽成院（一五七一一六一七）は第一〇七代天皇で、戦国期から近世初頭にかけて在位し、そのあいだに三回に及ぶ和漢聯句の千句興行を催し、また月次の御会を開くなど、和漢聯句の最盛期を創り上げた帝王と言っても過言ではない。和漢聯句ではほとんど和句のみの出句であった天皇は、慶長十六年（一六一一）三月に讓位したことをきっかけに、俄に漢句のみの聯句に打ち込むようになった。かねてより和漢聯句会で同席した近臣や五山僧衆とともに、折に触れて聯句にうち興じ、その讓位直後から慶長十九年十月にかけて行われた計三十点の作品が、本書において収録されている。

『国書総目録』によれば、本書は東京大学史料編纂所に所蔵院旧蔵写本が所蔵され、元禄三年刊の版本二巻二冊は国立国会図書館ほか十一點、また刊年不明のものは国立国会図書館ほか六點がある。国立国会図書館蔵版本（請求記号822.6）は当館ホームページ・デジタルコレクションにて画像を公開している。そこに一部難読箇所を書写者不明の書き入れが見られるが、

それを参考にとどめ、ここでは実際に閲覧し書誌調査を行った京都大学文学部蔵本（請求記号717a）を底本とした。

以下、書誌と作者紹介を記し、訓点付き本文に読み下しを示し、用語や出典について略注を付ける。なお、紙幅の都合により、聯句全三十点のうち、初回はまず巻頭の二作のみをここに示し、第三以降は次号より順次掲載する。

【書誌】

版本一冊、袋とじ九十七丁（上下二巻二冊（五十四丁・四十丁）の綴じ直し）。縦二十一・五糎、横十六糎。本文料紙は楮紙。表紙左上に刷り題簽、「鳳城聯句集」と記す。巻首に超然主人による序あり。内題「鳳城聯句集之上」。四周单边、版心に書名丁付。一面八行、訓点付き。巻末に刊記「元禄三年晚秋吉旦 開版／江戸 藤本兵左衛門／京 山本八兵衛／浅井喜兵衛」とあり、「浅井之印」・「橘政盈」印がある。奥書識語無し。虫損有り。

五言百句の聯句計三十点は、制作年次ではなく、東韻から咸韻まで平水韻の韻脚順に配列されている。

【作者】（出句順、第二以降は初出人名のみ）

（第二）

友竹 三江紹益、僧侶（臨濟）。元龜三年（一五七二）生、慶

安三年（一六五〇）没。道号三江、号友竹・友林・友雲

・友隣、また益長老と称す。建仁寺住持。

集雲

集雲守藤、僧侶（臨濟）。天正十一年（一五八三）生、

元和七年（一六二一）没。慶長二年に東福寺二二三世。

玄光

舜岳玄光、僧侶（臨濟）。生没年未詳、元和八年（一六

二二）生存。天竜寺光西堂に住す。

元廣

元廣有雅、僧侶（臨濟）。生没年未詳。南禅寺語心院。

有節

有節瑞保、僧侶（臨濟）。天文十七年（一五四八）生、

寛永十年（一六三三）没。相国寺九三世、鹿苑寺住持。

景洪

英岳景洪、僧侶（臨濟）。生年未詳、寛永五年（一六二

八）没。英叔周洪とも。南禅寺。

秀賢

舟橋秀賢、公家。天正三年（一五七五）生、慶長十九年

（一六一四）没。清原氏、弟、元廣。慶長六年に高倉か

ら舟橋に家名を改め、同七年に明経博士、慶長十八年從

四位上。後陽成天皇・後水尾天皇の侍読。

泰重

土御門泰重、公家。天正十四年（一五八六）生、寛文元

年（一六六一）没。元和三年正五位下、元和六年從四位

下、寛永四年從四位上、同八年四位下。

古潤

古潤慈稽、僧侶（浄土）。天文十三年（一五四四）生、

寛永十年（一六三三）没。慶長十三年に南禅寺住持。

御製

後陽成院、元龜二年（一五七一）生、元和三年（一六一

七）没。天正十四年十一月即位、慶長十六年三月に政仁

親王に讓位して太上天皇となる。

（第二）

菊齡

元彭、僧侶（臨濟）。天龍寺等。生没年未詳・天正十九

年十二月九日和漢聯句に出句。

光璘

玉峯光璘、僧侶（臨濟）。生没年未詳、承応二年（一六

五三）生存。東福寺宝勝院に住す。

玄召

棠陰玄召、僧侶（臨濟）。文禄元年（一五九二）生、寛

永二十年（一六四三）没。江陰とも称す。東福寺二三五

世。

【凡例】

・五言の句冒頭に通し番号を付した。

・用字は原則として通行字体を用いた。

・序文は適宜断句し、一部振り仮名を付した。

・訓点は底本のままにし、読み下しは原則として訓点に従うが、

一部句意に基づき適宜改めたものもある。

・注は最小に止め、難読箇所や一部の語彙と表現について典拠

と用例を示す。

【訓注】

鳳城聯句集序

聯句者詩之一体也

聯句は詩の一体なり。

若蘇軾韓愈亦

蘇軾韓愈のごときもまた、

作之抒情志焉然

之を作り情志を抒ぶ。しかれども

本朝之準或有異

本朝の準、或ひは、

于殊域也大抵賓主

殊域に異なること有るなり。大抵、賓主

研唱取青媼白対
偶酒至百韻而止矣
以故排字纂言涉
獵古今於文囿未有
勝於聯句嫺辭令者
雅薙勝拳往々以此
為翫良有以歲慶
長年間
太上皇游思典籍屢
名摺紳縉徒催此
遊於
鳳城逸韻佳対積
盈竹素我家珍藏
什襲久矣近加訓
点以便童蒙雖有
烏焉為馬之條不能
妄改正之適及草
稿粗紀所聞之顛
末為之叙
清明之節超然
主人漫題

研唱し、青きを取り白きに媼⁽¹⁾へ、
対偶し、酒をして百韻に至りて止む。
故を以て字を排^{はら}べ言を纂^{あつ}め、
古今を渉獵すること、文囿において未だ
聯句に勝るもの有らず。辭令を嫺^なふ者、
雅薙の勝拳、往々、此を以て
翫と為すこと、やや以て歳有り。
慶長年間の
太上皇、思を典籍に遊ばせ、しばしば
摺紳縉徒を名ざして、此の遊を
鳳城に催す。
逸韻佳対、
竹素に積盈す。我が家、珍藏
什襲すること久し。近ごろ訓点を加へ、
以て童蒙に便とす。
烏焉為馬の條有りと雖も、
妄りに之を改正すること能はず、適草稿
に及び、
あらあら聞く所の顛末を記し、
之が叙と為す。
清明の節、超然
主人漫題す

(1) 柳宗元「読韓愈所著毛穎伝後題」に「世之模擬竄窃、取
青媼白、肥皮厚肉、柔筋脆骨」と見える。字句の対偶な
どを工夫すること。

城聯句集卷之上

東第一 慶長十六年九月十日

- | | |
|--|---|
| 1 節 ^レ 後菊縦 ^ヒ 百 ^{アルセ} | 節後 菊縦ひ百あるも |
| 2 於 ^レ 宸麟 ^ニ 足 ^{レル} 楓 ^ハ | 宸に於いて麟 ⁽¹⁾ にして足れるは楓 友竹 |
| 3 時 ^レ 哉花落 ^レ 二 ^ニ | 時かな 花二 ⁽²⁾ に落ちて |
| 4 染 ^ム 露 ^ニ 雁来 ^ニ 紅 | 露に染む雁来紅 集雲 |
| 5 西 ^一 訪易 ^シ 斜 ^一 照 ^{ナリ} | 西訪 斜照なり易し 玄光 |
| 6 南 ^一 宗興 ^ス 巨叢 ^ヲ | 南宗 ⁽³⁾ 巨叢を興す 元廣 |
| 7 梵 ^一 音鐘互 ^ニ 答 | 梵音 鐘互に答ふ 有節 |
| 8 蘇 ^ス 味筆猶濃 | 蘇味 ⁽⁴⁾ 筆なほ濃し 景洪 |
| 9 韓 ^カ 海深 ^ニ 詩 ^ニ 者 | 韓が海は詩に深き者 秀賢 |
| 10 谷 ^カ 涯 ^ハ 斷 ^ル 望 ^ヲ 工 | 谷が涯は望 ⁽⁵⁾ を斷 ^{けつ} る工 泰重 |

(1) 「一麟」の略か。策彦周良「一枝春色一麟足、不覓十友
多」(梅辺会)、以心崇伝「聚弁雖多一麟足、出泥不染惟
德香」(読濂溪愛蓮記)。

(2) 地の意、『易経』に「天一地二」。

(3) 中国唐宋以降南方に栄えた禅宗流派。

(4) 「すみ(墨)」の当て字、出家者が食す酥油の味をかける。

(5) 白玉、詩句を練る黄庭堅を玉を磨く職人と喩えるか。

11 鼻穿^ツ香世界 鼻は穿^{つらぬ}く香世界

12 目^ハ極^ニ太虚^ニ空 目は極^{きは}むる太虚空

太上天皇^ニ後陽成院下倣^ニ此

13 濁^ハ劫^ニ独^ニ清^ル月 濁^ぬ劫 独^{ひとり}清^すめるは月

14 断^ハ橋^ニ宜^{キハ}統^ニ虹 断橋 続^{つづ}くに宜^{よろ}しきは虹

15 澗^ニ慙^ニ松^ニ受^レ爵^ヲ 澗^{たに}の慙^{ざん}ず 松は爵^{しやく}を受^うく

16 卯^ニ飲^ニ杏^ニ治^ス豊^ヲ 卯^う飲 杏は豊^{ほう}を治^しす

17 社^ニ過^テ罕^ニ逢^ニ燕 社過^まぎて罕^{まれ}に逢^あふ燕

18 陽^ハ浮^テ始^ニ振^ツ虫 陽は浮^うきて始^{はじ}て振^ふく虫

19 磨^ク光^ヲ天^ニ日^ノ磨^ル 光を磨^うく 天^{あま}の日^ひの磨^うす

20 洪^ニ徳^ヲ石^ニ門^ノ洪 徳^{おほい}を洪^いにす 石^{いし}門^{もん}の洪^{ほう}

(6) 俗世。屈原「举世皆濁我独清」(漁父)。

(7) 秦始皇帝が泰山封禅して暴风雨に遭った際、松の下で休息^{しやすみ}、その松を五大夫と封じた(史記・秦始皇本紀)。

(8) 杏は酒を指し、卯飲は朝酒、社日の酒は豊を治すという。五代・李涛「社公今日没心情、乞為治豊酒一瓶」。

(9) 宋・惠洪寛範の詩文を集めた『石門文字禅』。

21 雪^ハ打^ニ冷^ニ斎^ノ話^ヲ 雪は冷斎^{れいさい}の話を打^うす

22 朝^ニ論^ニ国^ニ器^ノ功^ヲ 朝^{あさ}には国器^{こくぎ}の功^{こう}を論^{ろん}す

23 驚^ハ班^ニ鷗^ニ代^ニ序^ヲ 驚^{おど}班 鷗^う代^{しろ}わる代^{しろ}わる序^{しゆ}づ

24 羽^ノ長^ニ鳳^ニ登^ゲ崇^ヲ 羽^うの長^{なが} 鳳^{ほう}登^あげ崇^{たか}ぶ

25 問^ニ竹^ニ盟^ヲ梅^ニ友 竹盟^{しよくめい}を問^とふは梅友

26 唱^ニ樵^ニ歌^ヲ草^ニ童 樵歌^{しよくか}を唱^うふるは草童

27 善^ハ従^ニ驅^ニ景^ニ杖 善^{ぜん}は従^{したが}ふ 景^{けい}を驅^かる杖^{しやく}に

28 意^ハ得^テ裊^ニ煙^ヲ籠 意^いは得^えたり 煙^{けむり}を裊^なやかにする籠^{かご}に洪

29 鷗^ハ峽^ニ依^ニ希^ヲ越^ニ 鷗^う峽^{きやく}に依^よ希^きたり 雲

30 鯤^ハ溟^ニ偶^ニ似^ス蒙^ニ 鯤^{こん}溟^{めい}に偶^ぐ似^にす 賢

(10) 惠洪寛範『冷齋夜話』。

(11) 国を支える人材。劉禹錫「漢室賢王後、孔門高第人。濟時成国器、樂道任天真」(許給事見哭工部劉尚書詩因命同作)。

(12) 序列をなす百官の喩え、唐・盧延讓「龍墀初立杖、鴛鴦列班行」(觀新歲朝賀)など。

(13) 鯤溟は『莊子』「北冥有魚、其名為鯤」(逍遙遊)。蒙は地名、莊子は宋国・蒙の人。

31 重言私語ノ約 重言 私語の約

32 四達聖尊ノ聡 四達 聖尊の聡

33 仕若蹈焚溺 仕は焚溺を蹈むが若し

34 士堪竭ニ信忠ニ 士は信忠を竭すに堪へたり

35 巖巖瞻斗ノ孟 巖巖たり 瞻斗の孟

36 爛爛眩暈戎 爛爛たり 暈眩めく戎

37 宋茂晋林浅 宋茂して晋林浅し

38 秦亡漢室隆 秦亡びて漢室隆んなり

39 鶯琴誰囀下 鶯琴は誰が囀下ぞ

御 澗 賢 澗 洪 廣 竹 雲 澗

40 蛛網ノ彼塵中 蛛網は彼の塵中 賢

(14) 約束を繰り返す、また先哲の言葉。『莊子・寓言』『寓言十九、重言十七』。

(15) 四方に及ぶこと。『莊子・刻意』『精神四達並流、無所不及』。ここは天子が善く進言を聴くこと。

(16) 王戎。「戎眼爛爛如巖下電」(晋書・王戎伝)。

(17) 東晋の後に南朝宋が興り、魏晋の間に竹林に隱遁した隱者も世に出てきた。

(18) 後漢・蔡邕の焦尾琴。「吳人有燒桐以爨者、邕聞火烈之聲、知其良木、因請而裁為琴、果有美音」(後漢書・蔡邕伝)。

41 市隱雲心ト 市隱 心を雲にしてトす 雲

42 夜叉露髮ト 夜叉 髪を露はにして鬢たり 御

43 樹頭烏幾帽ト 樹頭 烏いくばくか帽して 賢

44 桂魄影如弓ト 桂魄 影は弓の如し 竹

45 廬瀑澆胸ト 廬瀑 胸に澆ぐ 御

46 湘流酬死簡ト 湘流 死に酬ふ簡 雲

47年、千三宿慕 年は千三宿の慕

廣

51鏡「哀嘆泣向」 鏡衰へて泣きて向ふを嘆ず

雲

48義、六万「家風」 義は六つ万家の風

雲

52棋「戦作専攻」 棋戦ひて専ら攻ることを作す

洪

49世「味膾肝跖」 世味 肝を膾にする跖

御

53寒「橘傲霜凜」 寒橘 霜の凜たるに傲る

潤

50晚「生纏病馮」 晩生 病に纏る馮

潤

54秋「梢藏霧濛」 秋梢 霧の濛たるに藏る

賢

(19) 雲のような悠然たる心、トは居をトい選ぶこと。白居易「雪鬢隨身老、雲心著所安」(初夏閑吟兼呈韋賓客)。

易

55山「称随処主」 山は随処の主と称す

竹

(20) 月をいう。虎関師鍊「轆轤声響碎琉璃、桂魄当中烏鵲飛」(寒井対月)。

鵲

56院「試曲江公」 院は曲江の公を試む

潤

(21) 黃庭堅「酒澆胸次之壘塊、菊製短世之頽齡」(送王郎)など。

郎

57射「策軾輕翬」 策を射て軾は翬を軽んず

御

(22) 屈原を記念して楚地では端午の日に、飯を入れた竹筒を川に投げ込む。虎関師鍊「荊俗當時愍放臣、竹筒貯食楚江濱」(端午)。

楚

58廢「書陶責通」 書を廢して陶は通を責む

雲

(23) 三夜。出家者は俗世に慕う情を生じないように桑下に三宿しないという。「浮屠不三宿桑下、不欲久生恩愛、精之至也」(後漢書・襄楷伝)。英甫永雄「三宿恋桑山館月、一声早告不如帰」(待時鳥)。

三

59已「黄疎葉柳」 已に黄ばむ疎葉の柳

洪

(24) 春秋時代の盜跖。「盜跖日殺不辜、肝人之肉、暴戾恣睢、聚党数千人、横行天下、竟以寿終、是遵何德哉」(史記・伯夷列伝)。

跖

60半「白数茎蓬」 半ば白し数茎の蓬

潤

(26) 『臨濟録』「随处作主、立処皆真」。

真

(27) 謝策は試験方法の一つで、受験者が問題を選ぶことを「射」という。蘇軾が科挙試験で拔群の才能を表し、一躍有名になった。その策問を射る能力は、日を射落とす羿をも軽んずという。

羿

(25) 前漢の馮唐か。杜甫「貢喜音容間、馮招病疾纏」(哭韋大夫之晋)。

韋

47年、千三宿慕 年は千三宿の慕

廣

48義、六万「家風」 義は六つ万家の風

雲

52棋「戦作専攻」 棋戦ひて専ら攻ることを作す

洪

49世「味膾肝跖」 世味 肝を膾にする跖

御

53寒「橘傲霜凜」 寒橘 霜の凜たるに傲る

潤

50晚「生纏病馮」 晩生 病に纏る馮

潤

54秋「梢藏霧濛」 秋梢 霧の濛たるに藏る

賢

(19) 雲のような悠然たる心、トは居をトい選ぶこと。白居易「雪鬢隨身老、雲心著所安」(初夏閑吟兼呈韋賓客)。

易

55山「称随処主」 山は随処の主と称す

竹

(20) 月をいう。虎関師鍊「轆轤声響碎琉璃、桂魄当中烏鵲飛」(寒井対月)。

鵲

56院「試曲江公」 院は曲江の公を試む

潤

(21) 黃庭堅「酒澆胸次之壘塊、菊製短世之頽齡」(送王郎)など。

郎

57射「策軾輕翬」 策を射て軾は翬を軽んず

御

(22) 屈原を記念して楚地では端午の日に、飯を入れた竹筒を川に投げ込む。虎関師鍊「荊俗當時愍放臣、竹筒貯食楚江濱」(端午)。

楚

58廢「書陶責通」 書を廢して陶は通を責む

雲

(23) 三夜。出家者は俗世に慕う情を生じないように桑下に三宿しないという。「浮屠不三宿桑下、不欲久生恩愛、精之至也」(後漢書・襄楷伝)。英甫永雄「三宿恋桑山館月、一声早告不如帰」(待時鳥)。

三

59已「黄疎葉柳」 已に黄ばむ疎葉の柳

洪

(24) 春秋時代の盜跖。「盜跖日殺不辜、肝人之肉、暴戾恣睢、聚党数千人、横行天下、竟以寿終、是遵何德哉」(史記・伯夷列伝)。

跖

60半「白数茎蓬」 半ば白し数茎の蓬

潤

(26) 『臨濟録』「随处作主、立処皆真」。

真

(27) 謝策は試験方法の一つで、受験者が問題を選ぶことを「射」という。蘇軾が科挙試験で拔群の才能を表し、一躍有名になった。その策問を射る能力は、日を射落とす羿をも軽んずという。

羿

61 思^ル溢^レ外^ハ愁^ニ涙

雲

71 風^カ蘆^ト疑^ニ手^ノ舞^ハ

雲

62 氣^ウ凌^ク里^ハ聞^ニ鬢^ミ

御

72 タ^イ僅^ニ觀^ス齡^ノ終^ヲ

竹

63 謝^ハ詞^ニ顔^ヲ式^ヒ過^ル

賢

73 款^ノ立^レ釣^ノ磯^ノ翡^ニ

御

64 遷^ハ録^ス魏^ニ參^ト同^ヲ

澗

74 良^ノ才^ノ内^ノ廐^ノ驄^ヲ

洪

65 村^ニ養^フ吠^ル虚^ヲ犬^ヲ

御

75 相^ス人^ヲ歎^カ異^ニ曲^ヲ

澗

66 郷^ハ期^ニ連^{ナル}塞^ニ鴻^ヲ

洪

76 換^レ父^ニ禹^ノ疏^ス洛^ヲ

雲

67 招^テ涼^ヲ窓^ヲ構^フ北^ニ

雲

77 蓮^モ亦^ニ弄^ス泥^ヲ漢^ヲ

竹

68 弘^メ道^ヲ典^ヲ流^フ東^ニ

竹

78 英^{ナリ}兮^ニ扛^ル鼎^ヲ雄^ヲ

廣

69 慚^シ十^ヲ什^ノ門^ノ哲^ヲ

澗

79 撲^キ扠^ヲ俱^ニ闢^ム力^ヲ

澗

70 按^ス三^ヲ渭^ノ水^ノ翁^ヲ

廣

80 緇^カ素^ヲ両^ヲ重^ニ瞳^ヲ

洪

(28) 『論語・雍也』「有顔回者、好学、不遷怒、不二過」。

(29) 後漢・魏伯陽の『周易參同契』

(30) 鳩摩羅什の弟子「什門十哲」。

(31) 『史記・齊太公世家』「天下三分、其二歸周者、太公之謀計居多」。

(32) 九方縲、人相を見る名人。『莊子』「子綦有八子、陳諸前、召九曰方縲曰、為我相吾子、孰為祥」。また『列子』に秦穆公に良馬を見つける故事も記される。

(33) 洛は洪水、大禹治水の故事。

(34) 大力を奮う英雄。蘇軾「難堪踞床洗、寧挹扛鼎雄」（安期生並引）。

81	行 ^レ 化 ^フ 垂 ^ル 簾 ^ノ 舜	化を行ふ垂簾の舜	澗
82	甘 ^フ 閑 ^テ 嗜 ^フ 酒 ^ヲ 种 ^シ	閑を甘ふ 酒を嗜む种	賢
83	避 ^テ 炎 ^ヲ 泉 ^ニ 有 ^リ 勝	炎きを避けて泉に勝有り	竹
84	讓 ^テ 畔 ^ヲ 歳 ^ニ 弥 ^シ 豊 ^{ナリ}	畔を讓りて歳いよいよ豊かなり	澗
85	農 ^ハ 課 ^ス 稼 ^ノ 村 ^ノ 集 ^ヲ	農は稼村の集を課す	御
86	君 ^ハ 安 ^ス 綺 ^ノ 邦 ^ノ 宮 ^ヲ	君は綺邦の宮を安ず	澗
87	推 ^テ 単 ^ノ 輪 ^ヲ 学 ^ブ 步 ^ヲ	単輪を推すは学步	賡
88	堅 ^{スル} 片 ^ハ 瓦 ^ニ 愚 ^ニ 衷 ^ニ	片瓦を堅くするは愚衷	賢
89	路 ^ノ 古 ^テ 苔 ^ヲ 伸 ^ベ 脚 ^ヲ	路古りて苔脚を伸ばす	洪
90	冬 ^ニ 蔽 ^レ 楮 ^ヲ 蔽 ^レ 躬 ^ヲ	夕蔽かにして楮躬を蔽ふ	賢
(35)	北宋隱士种放か。謙岩「華山深处一閑人、衣払宋朝天下 塵。誰為君王能納諫、先生元是不忠臣」(种放帰華山図)。 (36) 百姓が農地の境界を譲り合う。教化が行き届く現れ。『史 記・周本紀』「耕者皆讓畔、民俗皆讓長」。		
91	炉 ^ノ 談 ^ヲ 春 ^ノ 入 ^ル 座 ^ニ	炉談 春座に入る	御

92	夜 ^ノ 諷 ^ヲ 牖 ^ノ 親 ^ム 釭 ^ヲ	夜諷 牖釭を親しむ	雲
93	鄒 ^ノ 魯 ^ノ 柝 ^ノ 交 ^ニ 響 ^ヲ	鄒魯 柝響を交ゆ	雲
94	禄 ^ノ 渠 ^ノ 棟 ^ノ 任 ^{スル} 充 ^ニ	禄渠 棟充つるに任す	澗
95	吟 ^ハ 高 ^ノ 塵 ^ニ 睡 ^ル 鳥 ^ヲ	吟は高し睡を塵にする鳥	洪
96	占 ^ハ 法 ^ヲ 夢 ^ニ 祥 ^ヲ 熊 ^ヲ	占の法 祥を夢むる熊	竹
97	何 ^ノ 弟 ^ノ 栗 ^ノ 同 ^ニ 隊 ^ヲ	何れの弟ぞ 栗は同隊	賢
98	顧 ^レ 吾 ^ヲ 藻 ^ノ 五 ^ノ 窮 ^ヲ	吾を顧れば藻は五窮	御
99	破 ^テ 昏 ^ヲ 伝 ^ハ 御 ^ノ 燭 ^ヲ	昏を破りて御燭を伝ふ	澗
100	聴 ^テ 雨 ^ヲ 掩 ^ニ 孤 ^ノ 簾 ^ヲ	雨を聴きて孤簾を掩ふ	御
(37)	鄒は孟子の出生地で、魯は孔子の故郷。併せて文化の地 をいう。唐朗士元「鄒魯詩書国、応無鼙鼓喧」(送裴補闕 入河南)。また宋末方回「鄒魯相望擊柝間、亦顔誰許独晞 顔」(次韻趙朴翁赴衍聖公峰山書院之招)。 (38) 天禄閣と石渠閣、前漢の校書と藏書の建物。 (39) 韓愈「送窮文」にみえる五鬼、智窮・学窮・文窮・命窮 ・交窮をいう。		

冬第二 慶長十六年十月二十九日

1 不^レ借^二陽^一和^ノ力^ヲ 陽^ハ和^ノの力を借りず

2 著^ク花^ヲ雪裏^ノ松 花を著く 雪裏の松

3 因^レ陪^{スルニ}風^ニ雅^ノ宴^ニ 風雅の宴に陪するにより

4 帶^レ薰^ヲ水沈^ノ籠 薰を帶ぶ 水沈^ハの籠

5 晦^ス迹^ヲ翥^ニ煙^ニ雁 迹を晦す 煙に翥る雁

6 訪^フ寥^ヲ語^リ砌^ニ蛭 寥^ハしきを訪ふ 砌に語る蛭

7 素^ハ娥^ヲ投^{スルハ}宿^ニ露 素娥^ハ 宿を投ずるは露

8 緑^ハ髮^ニ聳^ル雲^ニ峰 緑髮 雲に聳る峰

9 涼^ハ似^{ホリモ}秋^ニ涼^ニ簾 秋よりも涼しきは涼簾

10 老^ニ于^{ミチニ}行^ニ老^ニ第 行に老^ハんたるは老第

(1) 春また春の暖かさ。『錦繡綴』「開時費尽陽和力、落処難堪一陣風」(贊寧「落花」)。

(2) 沈香。蘇軾「西閣珠簾卷落暉、水沈煙斷佩声微」(九日舟中望見有美堂上魯少卿飲以詩戲之二首、其二)。

(3) 嫦娥の別称、ここでは月。『文選』に謝莊「引玄兔於帝台、集素娥於後庭」(月賦)。

11 影^ハ西^ス鴉^ノ背^ノ照 影は西す鴉背の照

12 賊^ハ已^ニ蚌^ノ胎^ノ琮 賊のみ已に蚌胎の琮

13 山^ハ送^ニ釣^ニ船^ヲ走^ル 山は釣船を送りて走る

14 座^ハ困^ニ戰^ニ局^ヲ攻 座は戦局を困みて攻む

15 皓^ハ鬚^ハ天^ノ下^ノ白 皓が鬚は天下白

16 匡^ハ力^ム壁^ノ間^ノ釘 匡^ハは力む壁間の釘

17 掃^テ又^ハ生^ハ書^ハ葉 掃きてまた生ずるは書葉

18 盛^{シメ}無^レ落^ハ繡^ハ蓉 盛んにして落つること無きは繡蓉

19 官^ハ裳^ニ文^ニ以^レ礼^ヲ 官裳 文るに礼を以てす

20 孤^ハ枕^ヲ醒^テ堪^{タリ}慵^ニ 孤枕 醒めて慵きに堪へたり

(4) 黃庭堅「老蚌胎中珠是賊、醯鷄瓮里天幾大」(演雅)。

(5) 『蒙求』「匡衡鑿壁」。

(6) 服裝や寝具などに刺繡された芙蓉の紋様。杜甫「屏開金

孔雀、褥隱繡芙蓉」(李監宅)。

21 硯海^ヲ 写^ハ 愁^ヲ 變^ス 硯海 愁を写すは變ず

22 鏡湖^ニ 尽^メ 美^ヲ 濃^シ 鏡湖 美を尽して濃し

23 艷^ニ 詞^ヲ 招^ク 獄^ヲ 主^ヲ 艷詞 獄主を招く

24 心^ニ 印^ヲ 起^ス 空^ヲ 宗^ヲ 心印⁽⁸⁾ 空宗を起こす

25 塵^ニ 味^ヲ 一^ヲ 塵^ヲ 沼 塵味 一塵の沼

26 世^ニ 冤^ヲ 七^ノ 世^ノ 雍 世冤 七世の雍

27 雨^ヲ 過^テ 梨^ヲ 荔^ヲ 直⁽⁹⁾ 雨過ぎて梨は荔直

28 颯^ニ 動^テ 柳^ヲ 髻^ヲ 鬆 颯動きて柳は髻鬆

29 商^ニ 冷^ニ 蟬^ヲ 緘^ム ロ^ヲ 商冷やかにして蟬は口を緘む

30 年^ニ 衰^ム 鸞^ヲ 改^ム 容^ヲ 年衰へて鸞は容を改む

(7) 訴訟の当事者。『晋書・王彪之伝』「彪之以球為獄主、身無王爵」。

(8) 『三休詩』に「寂寞伝心印、無言亦已忘」(羊士諤「西郊蘭若」)。

(9) 粗末でだらしない。『狂雲集』「平生贏得荔直名、信口言詮群衆驚」(不嫌念起所二首)。

31 百^ニ 憂^ヲ 陵^ヲ 繞^レ 己^ニ 百憂 陵己れに繞ふ

32 千^ニ 慮^ヲ 召^ク 聴^ク 訟^ヲ 千慮 召⁽¹⁰⁾ 訟を聴く

33 暖^ニ 戲^ル 江^ノ 南^ノ 鷗 暖に戯るる江南の鷗

34 電^ノ 行^ク 冀^ノ 北^ノ 驕^ヲ 電の如くに行く冀北の驕

35 萋^ニ 菲^ヲ 當^ル 妾^ニ 草 萋菲 妾に当たる草

36 卓^ニ 拔^ル 出^ル 群^ヲ 棕^ヲ 卓拔 群を出る棕⁽¹²⁾

37 悴^ニ 鬢^ヲ 素^ヲ 絲^ヲ 総^ヲ 悴鬢 素糸を以て総す

38 野^ニ 生^ル 紅^ヲ 栗^ヲ 春^ヲ 野生⁽¹³⁾ 紅栗を春く

39 景^ニ 吾^ハ 真^ヲ 富^ヲ 有 景は吾が真の富有

40 霖^ハ 汝^ガ 是^ニ 奇^ヲ 逢 霖は汝がこれ奇逢

(10) 召公、召伯。『史記・燕召公世家』「召伯聴訟甘棠之下」。

(11) 『左伝・昭公四年』「冀之北土、馬之所生」。

(12) 杜甫「自是衆木乱紛紛、海棕焉知身出群」(海棕行)。

(13) 男子の自称、五山詩に多用。宜竹「借地開園作雨時、寒
蔬也足野生涯」(園蔬化蝶)。

41 泉響^テ琴惟^ニ肖^{タリ} 泉響きて琴ただ肖たり

42 暑消^メ扇任^{サセアラハアレ}從^ニ 暑さ消して扇さもあらばあれ

43 渭川蒼雪漲^ル 渭川 蒼雪漲る

44 漢室紫泥封^ス 漢室 紫泥封ず

45 隆準誤^ル劉磨^ヲ 隆準^{一五} 劉を誤る磨

46 活機唆^{ソノハカス}濟蹤^ニ 活機^{一六} 濟を唆す蹤

47 嶮崖鞋^{キリミ}鹹^{ニス}耳^ヲ 嶮崖 鞋耳を鹹にす

48 環堵卷^{マル}蟠^ニ胸^ニ 環堵^{一八} 卷胸に蟠る

49 蛩乱^テ風鑽^レ燧^ヲ 蛩乱れて風は燧を鑽る

50 蝶驚^テ曉厭^フ鐘^ヲ 蝶驚きて曉は鐘を厭ふ

(14) 杜牧「何人為倚東樓柱、正是千山雪漲溪」(宣州開元寺)。

(15) 『史記・高祖本紀』「高祖為人、隆準而龍顏」。

(16) 悟りに通ずる資質。

(17) 戦いで敵の耳を切り取ること。蘇軾「但恐詩力弱、關健
未免鹹」(次韻子由除日見寄)。

(18) 陶淵明「好讀書：環堵蕭然」(五柳先生伝)。

51 楚弓藏^レ在^ニ月^ニ 楚弓^{一九} 藏れて月に在り

52 越艇漾^{ツテ}横^ニ 越艇 漾つて濶に横ふ

53 今^{ハナリ}是^ニ伴^ニ鷗^ニ范^ニ 今はこれなり鷗に伴ふ范^{二一}

54 県治馴^レ雉^ニ恭^ニ 県は治りて雉を馴しむる恭^{二二}

55 境遭^ニ林^ニ袖^ニ 境は林袖に袖まるるに遭ふ

56 村使^ハ社^ニ鐘^ヲ 村は社鐘を鐘しむ

57 翹^テ埃^ニ明^ニ朝^ニ杏^ニ 翹^{二四}て埃つ明朝の杏

58 手栽^{カラ}滿^ニ戸^ニ榕^ニ 手から栽うる満戸の榕

59 絢^{ナメ}声^ヲ鶯^ニ合^ニ律^ニ 声を絢なして鶯律に合ふ

60 歛^テ戮^ヲ鵬^ニ占^ニ凶^ニ 戮^{ハネ}を斂めて鵬凶^{二五}を占ふ

(19) 『孔子家語』「楚人失弓、楚人得之、又何求之」。

(20) 范蠡(蒙求・范蠡泛湖)。

(21) 魯恭（後漢書・卓魯魏劉列伝）。

(22) 賈誼「鵬鳥賦」〔誼為長沙王伝、三年有鵬鳥飛入誼舍、止於坐隅、鵬似号、不祥鳥也〕（文選）。

61 沈^レ塚 潮 如^レ弔^一 ^{一スルカ} 沈塚^{②③} 潮弔するが如し

62 類^一齡 日^ニ去^ル 驚^{ミヲ} 類齡 日に驚を去る

63 菊 摧^テ金 累^ス土^ヲ 菊摧^{おろ}て金は土に累ぬ

64 楮^一片 被^レ經 冬^ノ 楮片 被^ひは冬を経

65 光^ル国 玉^ニ衡^ノ 舜 国に光る玉衡^{②④}の舜

66 曜^レ都^ニ 火 徳^ノ 農 都に曜^{かがや}く火徳^{②⑤}の農

67 拒^ム医 禪^ヲ本^一草^{②⑥} 医を拒む禪の本草

68 抱^レ独 意 蒙^一茸 独を抱^{②⑦}く意は蒙茸

69 情 味 多^ハ輕^レ禄^ヲ 情味 多くは禄を輕んず

70 讒 諛 儘 淬^ツ鋒^ヲ 讒諛 儘鋒^{みなさき}を淬^{にら}ぐ

(23) 水底に葬られる人、屈原を指す。韓愈「剥苔吊斑林、角飯餌沈塚」（会合聯句）。

(24) 北斗七星。『尚書・舜典』「正月上日、（舜）受終於文祖。在璇璣玉衡、以齊七政」。

(25) 『三皇本紀』「神農氏、姜姓以火徳王」。

(26) 『神農本草経』の連想か。

(27) 黃庭堅「吾友陳師道、抱独門掃軌」（奉和文潜贈無咎篇末多見及既見君子云胡不喜為韻、其八）。

71 収^ル身^ヲ 氷^ニ旅^一 泛 身を氷に収むるは旅^{②⑧}泛

72 扨^フ口^ニ 道^ニ凡^一庸 口を道に扨ぶは凡庸

73 舞^ハ曲^ヲ 涼 州^ノ 鶴 曲を舞はす涼州の鶴

74 綴^ル脾^ヲ 廬^一阜^ノ 蜂 脾を綴る廬阜の蜂

75 鼓^ハ清^ヲ 商 瀑 韻 清商を鼓するは瀑韻

76 図^{スル}陣^ハ 磧^ヲ天^一 衡 陣磧^{③⑩}を図するは天衡

77 雄^一智^ハ 為^レ銛^ト 刃 雄智は銛とする刃

78 慈^一恩^ハ 無^レ渡 幢 慈恩は渡の無き幢^{ふね}

79 話^テ竿^ヲ 漁 互^ニ 答 竿を話して漁互ひに答ふ

80 扨^メ冕^ヲ 各^一 望^ム 顚^リ 冕を扨して各おの望むこと顚^{きたり}たり 竹

(28) さすらい。杜甫「諸生旧短褐、旅泛一浮萍」(橋陵詩三十韻因呈果内諸官)。

(29) 蜂の巣が臍臍に似ることから「蜜脾」という。蘇軾門下の晁補之の詩「題廬山」に「南康南麓江州北、五百僧房綴蜜脾」とある。廬阜は廬山。

(30) 蘇軾「八陣碛」詩「惟余八陣図、千古壯夔峽」。夔峽は長江の要所瞿塘峽の別名で、その峻しさをここで「天衝」と表すか。

(31) 仰ぐさま。『淮南子・俶真訓』「群生莫不顯頤然仰其德以和順」。

81 種^レ学^ハ苗^ヲ而^ニ秀^ニ 学を種れば苗にして秀づ

82 極^レ妍^ム桃^ヲ彼^ノ穠^ニ 妍を極む 桃かの穠なり

83 春^ノ容^ヲ終^ニ不^レ醜^{カラ} 春容 終に醜からず

84 霞^ノ脚^ヲ僅^ニ雖^レ供^{スト} 霞脚 僅かに供すと雖も

85 睡^ノ譜^ヲ懶^ニ儒^ノ課^ヲ 睡譜 懶儒の課

86 辨^ノ鋒^ヲ説^ク客^ノ縦^ヲ 辨鋒 説客の縦

87 鷺^ヲ成^ス鳥^ハ鳩^ト舌^ヲ 鷺を鳥と成すは鳩舌

88 鰥^ノ殞^ル羽^ハ鴻^ノ溶^ヲ 鰥羽に殞すは鴻溶

89 狂^ノ瀾^ヲ堤^ノ難^シ築^ル 狂瀾 堤築き難し

90 広^ノ寒^ヲ霧^ノ欲^シ鎔^{ント} 広寒 霧鎔んと欲す

(32) 鳩舌、言葉が正しくない様子。孟子・滕文公上「今也南蛮鳩舌之人、非先王之道」。蘇軾「門開訟氓入、日晏鳩舌競」(答王定国問疾)。

(33) 波が荒いさま。唐・皮日休「落照射鴻溶、清輝蕩拋擲」。(34) 月にある広寒殿、また月をいう。蘇軾の門人張耒「猶勝嫦娥不嫁人、夜夜孤眠広寒殿」(古文真宝・七夕歌)。

91 香^ノ蹊^ヲ前^ニ導^ク桂^ヲ 香蹊 前に導く桂

92 忍^ノ界^ヲ曲^ヲ從^テ縱^ニ 忍界 曲りて従ふ縱

93 物^ノ外^ヲ談^ス顔^ノ孔^ヲ 物外 顔孔を談ず

94 参^ノ同^ヲ並^ニ寔^ニ邕^ヲ 参同 寔邕を並ぶ

95 矢^ヲ無^レ他^ハ匹^ト鳥^ヲ 矢りて他無きは匹鳥

96 ト有^ル獲^ハ非^ハ龍^ヲ ト獲有るは非龍

97 楓^ノ謝^ル任^ス車^ノ仆^ニ 楓 謝して車仆るるに任す

98 竹揺^テ訛^ノ履^{スル}跽^一

竹揺ぎて履の跽たるを訛る^{あやま}

節

99 離筵^{スル}酸鼻^友

離筵 酸鼻する友

御

100 将柄^レ乞^ノ降^一匈

将柄 降を乞ふ匈

雲

(35) 顔回と孔子。

(36) 後漢の陳寔と蔡邕か。

(37) つがいの鳥、鴛鴦をいう。陸機「白日既没明灯輝、夜禽赴林匹鳥棲」(玉台新詠・燕歌行)。

(よう こうほう・武蔵野大学講師)